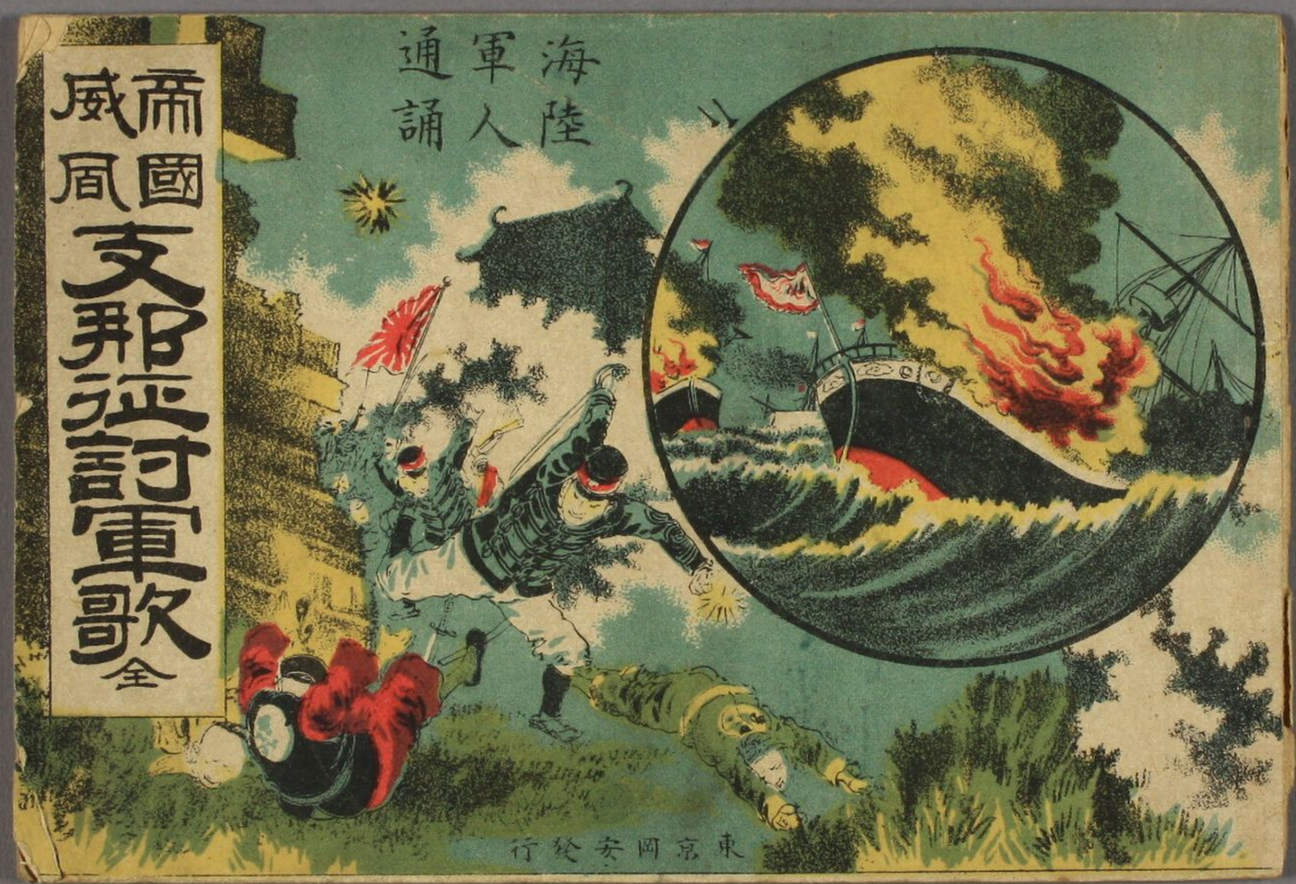
帝國威風 支那征討軍歌 全

海陸軍人通誦



東京岡安發行

洋林氏

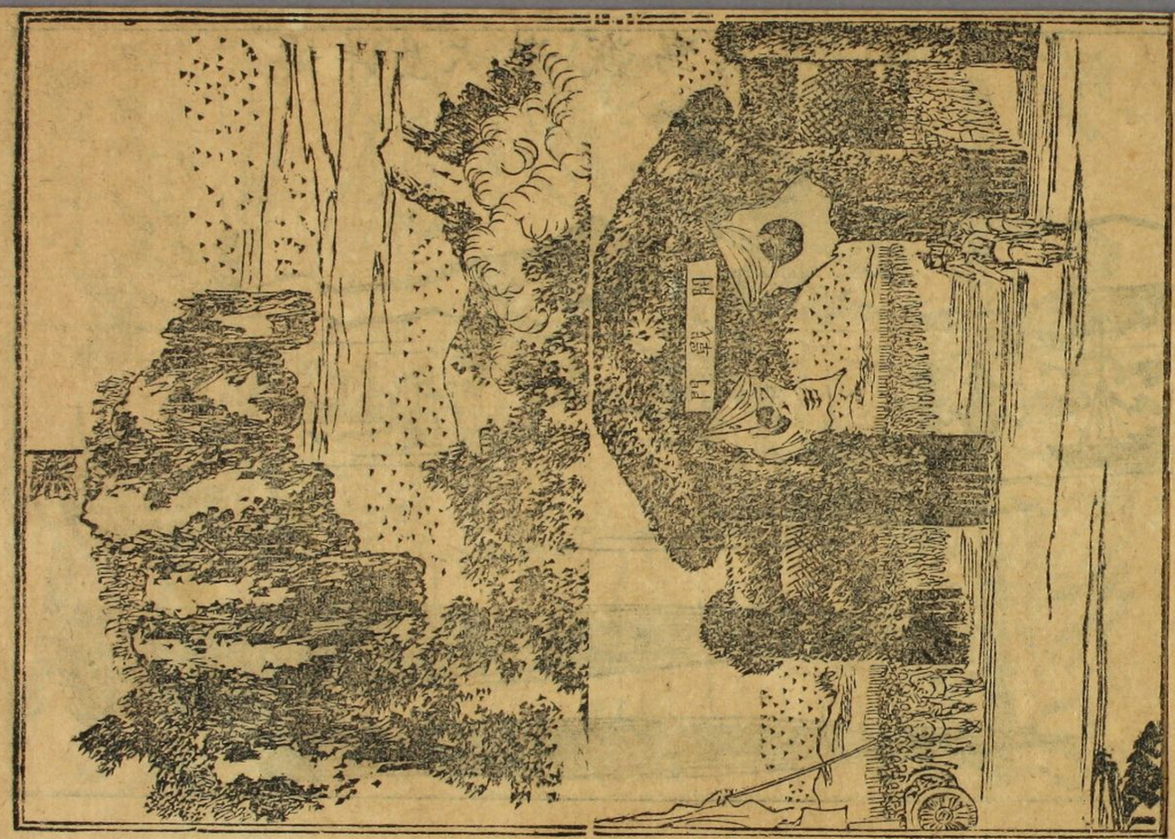
詔勅

天祐ヲ保全シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國皇帝ハ忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ清國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ百僚有司ハ宜ク朕カ意ヲ體シ陸上ニ海面ニ清國ニ對シテ交戰ノ事ニ從ヒ以テ國家ノ目的ヲ達スルニ努力スヘシ苟ヲ國際法ニ違ラサル限リ各々權能ニ應シテ一切ノ手段ヲ盡スニ於テ必ス遺漏ナカラムコトヲ期セヨ

惟フニ朕カ即位以來茲ニ二十有餘年文明ノ化ヲ平和ノ治ニ求メ事ヲ外國ニ構フルノ極メテ不可ナルヲ信シ有司ヲシテ常ニ友邦ノ誼ヲ篤クスルニ努力セシメ幸ニ列國ノ交際ハ年ヲ逐フテ親密ヲ加フ何ソ料ラム清國ノ朝鮮事件ニ於ケル我ニ對シテ著著鄰交ニ戻リ信義ヲ失ス

ルノ擧ニ出テムトハ朝鮮ハ帝國カ其始ニ啓誘シテ列國ノ伍伴ニ就カシメタル獨立ノ一國タリ而シテ清國ハ每ニ自テ朝鮮ヲ以テ屬邦ト稱シ陰ニ陽ニ其ノ內政ニ干渉シ其ノ內亂アルニ於テ口ヲ屬邦ノ極難ニ籍キ兵ヲ朝鮮ニ出シタリ朕ハ明治十五年ノ條約ニ依リ兵ヲ出シテ變ニ備ヘシメ更ニ朝鮮ヲシテ禍亂ヲ永遠ニ免レ治安ヲ將來ニ保タシメ以テ東洋全局ノ平和ヲ維持セムト欲シ先ツ清ニ告クルニ協同事ニ從ハムコトヲ以テシタルニ清國ハ飜テ種々ノ辭柄ヲ設ケ之ヲ拒ミタリ帝國ハ是ニ於テ朝鮮ニ勸ムルニ其ノ紕政ヲ釐革シ內ハ治安ノ基ヲ堅クシ外ハ獨立國ノ權義ヲ全クセムコトヲ以テシタルニ朝鮮ハ既ニ之ヲ肯諾シタルモ清國ハ終始陰ニ居テ百方其目的ヲ妨碍シ剩ヘ辭ヲ左右ニ托シ時機ヲ緩シ以テ其水陸ノ備ヲ整ヘ一旦成ルヲ告クルヤ直ニ其ノ力ヲ以テ其欲望ヲ達セントシ更ニ大兵ヲ韓土ニ派シ我艦ヲ韓海ニ要擊シ殆ト亡狀ヲ極メタリ即チ清國ノ計圖タル明ニ朝鮮國治安ノ責ヲシテ歸スル所アラザラシメ帝國カ率先シテ之ヲ諸獨立國ノ列ニ伍セシメタル朝鮮ノ地位ハ之ヲ表示スルノ條約ト共ニ之ヲ蒙晦ニ付シ以テ帝國ノ權利利益ヲ損傷シ以テ東洋ノ平和ヲシテ永ク擔保ナカラシムルニ存スルヤ疑フベカラズ熟々其ノ爲ス所ニ就テ深ク其ノ謀計ノ存スル所ヲ揣ルニ實ニ始ヨリ平和ヲ犧牲トシテ其ノ非望ヲ遂ゲムトスルモノト謂ハサルヘカラス事既ニ茲ニ至ル朕平和ト相終始シテ以テ帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚スルニ專ナリト雖モ亦公ニ戰ヲ宣セサルヲ得ザルナリ汝有衆ノ忠實勇武ニ倚賴シ速ニ平和ヲ永遠ニ



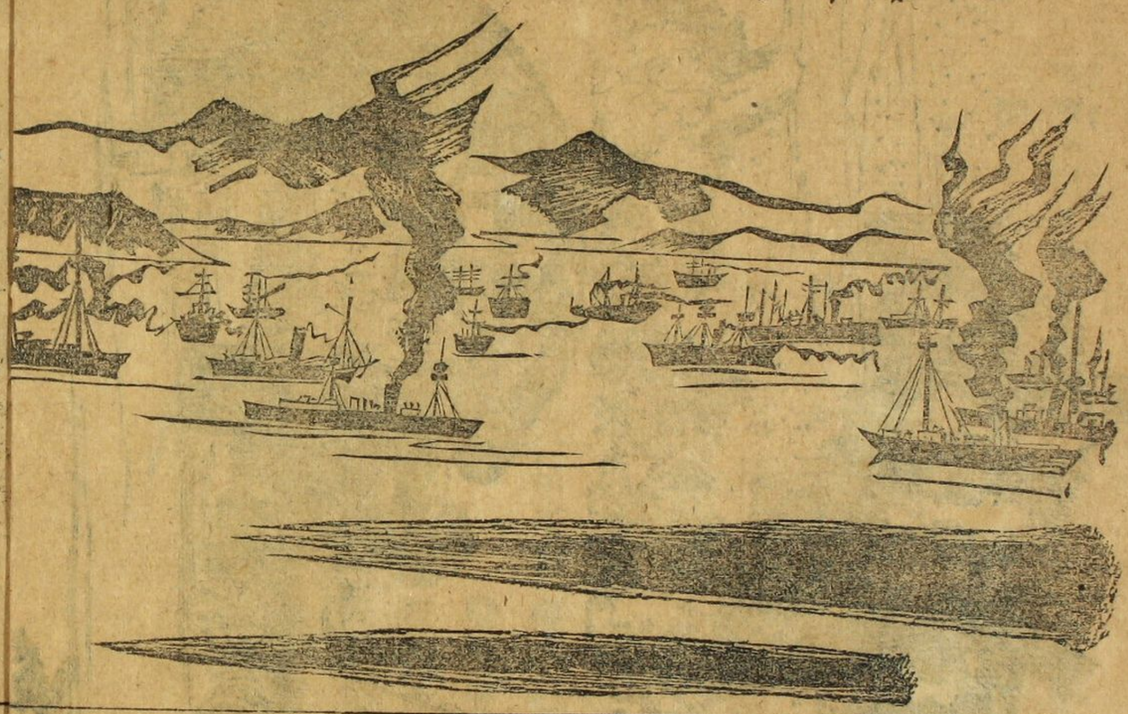
克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ全クセムコトヲ期ス

御名御璽

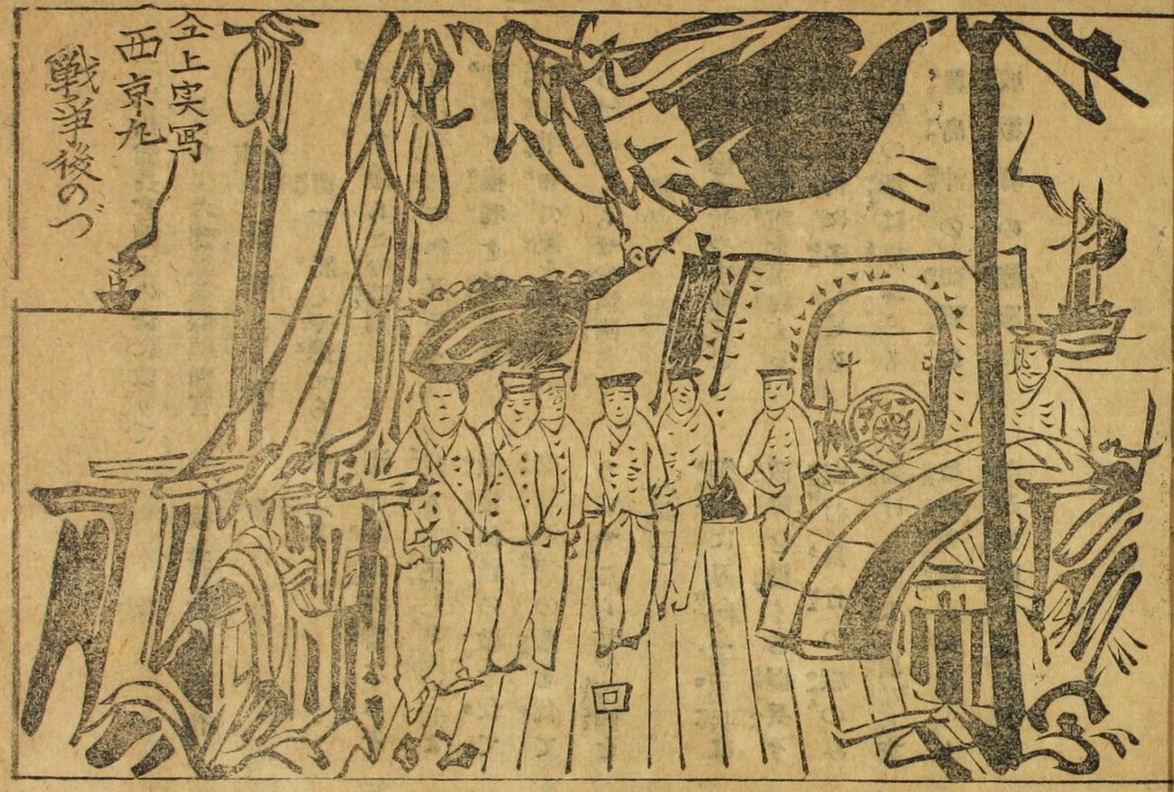
明治二十七年八月一日

内閣總理大臣 伯爵 伊藤博文
遞信大臣 伯爵 黑田清隆
海軍大臣 伯爵 西鄕從道
内務大臣 伯爵 井上馨
陸軍大臣 伯爵 大山巖
農商務大臣 子爵 榎本武揚
外務大臣 陸奥宗光
大藏大臣 渡邊國武
文部大臣 井上毅
司法大臣 芳川顯正

海洋島大激戦寫眞正図



仝上実写
西京九
戦争後のづ



有栖川総長宮殿下の命に依りて

參謀本部編纂課編輯官　横井忠直氏作

東洋大戰　日勝軍歌

第一　膺てや懲せらせや（其一）

膺てや懲らせや清國を　清ハ御國の讐なるぞ
東洋平和の讐なるぞ　伐ちて正しき國とせよ
御國の權利を妨ぐる　傲慢無禮の敵を伐て
東洋平和の義を知らぬ　蒙昧頑固の敵を伐て
うてやこらせや清國を　うてやこらせや清國を

同（其二）

膺てや懲らせや支那兵を　御國に刄向ふ支那兵は
御國の高誼を蔑視する　政府を助くる弱兵ぞ
其數如何に多くとも　概ぬ烏合の族のみ
武器の形は揃ふとも　畫ける美人に異ならず
豊島沖の海戰に　彼の軍艦は碎けゝり
成歡驛の陸戰に　彼か軍隊ハ敗れたり
斯くも碎くる軍艦と　斯くも敗るゝ軍隊ハ
たとひ幾萬ありとても　いかでか我に當るべき
うてやこらせや支那兵を　うてやこらせや支那兵を

第二　北京まで

支那も昔は聖賢の　教ありつる國なれど
代を易へ歳を經る儘に　次第に開化のあとしざり
口にハ中華と誇れとも　心の野蠻は反比例
其蒙昧を破らずと　我東洋の夜は明けど
時こそ來たれいざ來れ　豊榮昇る旭の旗を
北京の城に押し建て　無明の闇を照らすべし
これぞ名におふ日の本の　皇御國の務なる
皇御軍　ひつゝ　進めや進め北京まで

第三　丈夫

我丈夫は山行かば　草むす屍海往かば
水つく該と昔より　誓ひて國に盡しけり
人生僅五十年　命惜みて萬代の

名を汚すべき事やある
君に捧ぐる命ぞや
敵の矢玉を脊に負ふな
進み進みて顧みず
東洋平和の守護神と
進めや進め益荒雄よ

第四　敵愾

夫れ此たびの戰は
東洋前途の安寧を
敵慮の程を畏みて
君の御爲國の爲
軍旗の許はすめらぎの
健氣に働き敵愾に
また上官の命令は
水火の中も彈丸の
此精神たに撓まずば

息ある限り進み擊て
國の譽を增す身ぞや
面を向いて進み往け
斃れて止まぬ魂は
末の代かけて祭られむ
進めや進め益荒雄よ

たゝ朝鮮の爲ならず
圖らせ給ふ敵愾なり
此目的を遂ぐる迄
平和の警を夷げよ
玉座の前に均しきぞ
あづかることを心掛け
畏き勅語と服從し
雨や霰も厭ふなよ
如何なる事か成らざらむ

黄金の鵄も雲井より
平和の基礎を永遠に
敵慮を安んじ奉り

赫奕く勳功を待つならむ
建てゝ勳功を完くし
凱歌を揚げて旋るべし

◎平壤の大捷

大同江ハ廣けれど
忠勇無双の我軍は
險阻を待みし敵兵ハ
すめら御國の兵士にハ
頃しも秋の十六夜の
砲煙彈雨透間なく
多勢を特みし敵兵も
暫し支へて防ぐ間も
實に理りや昔より
光り正しき日の旗は
この勢に乘じなば

大城山は高けれど
苦もなく踰て進みけり
いかに膽をや冷しけん
翼ありとや思ひけん
月に閃めく日本刀
平壤城を攻め圍む
道なき隊は治らず
嵐に木の葉と乱れ散る
仁義の師に敵はなく
諸越までに輝けり
凱歌は近き内ならん

渤海灣は深くとも

◎黄海の大捷

我海軍はいち早く
又も浪路を蹴破て
彼の北洋の艦隊は
我が聯合の艦隊は
秋も半を過るころ
端なく起る艦戰さ
或は砕き又は燒き
其動しは黄海の
哀れ昨日ハ平壤の
艦の數々打ち沈め
神の祐くる皇軍に
直隷海峽乘越えて
北京之城は遠くとも
豐島沖に戰かひつ
突しハ何處威海衛
名のみ殘て影も無く
海原廣く占にけり
海洋島の邊りにて
逐つ逐れつ彼艦を
底の藻屑と成果ぬ
波音高く響くなり
敵打拂ひ今日は又
海陸並び進み行く
何れの敵か對べき
進めや進め順天府

新撰支那征伐軍歌集

寒英居士編

○出師の初歩

すゝめやすゝめ日本人
朝鮮すでに治まれば
忽ち支那地に忽入りて
夫より四方に羽をのばし
つぎ〳〵蒙古にもぐり入
時をものべず忽ちに
其州郡に號令し
上海香港それ〳〵に
和合の春をかもしつゝ
天地に誓ひて文明の
進むは日本の義務なかし
百万斤の大砲の
正しき導火にしたがひて
今の支那人清國は
其時夷のひとむれも

福羽美静作

日本武人ハ文明の
平壤義州に難もなし
鳳凰廳より手を下し
盛京省をわがものと
昔の夷を打ひらき
かの北京を攻つぶし
旅順も芝罘も後になし
數多の船をつなかせて
西洋諸國をよろこばせ
德義を宇宙にのぶる迄
僅かばかりの火口にて
大氣も動すものなれば
ゆけど天地に敵もなし
如何なる故にて成立し
事もなしえて誇りしも

とし立つうちに腐敗して
他より攻めて万人民の
大氣を入れて日のもとの
公明至大の法をもて
西洋諸州もろともに
すゝめやすゝめ日本人

●往け往け日本男子

其一

往け往け日本男子
開闢の昔より
試すは今の時
神の敵人の敵
起て丈夫往け丈夫

其二

知らさるか我敵い
大國とこれ誇り
其一新いれのづから
辛苦を救ひ文明の
萬世無窮の帝風を
亞細亞の草木に被らせ
萬歲唱ふる時までも
今にろすゝむ時なるぞ

外山正一作

千歲の一遇ぞ
鍛へたる我の腕
失ふな此機會
うち殺せこの腕で
往々天下に周く武勇を示
大惡の人非人
小國をこれ侵す
野蠻をべこれ極め
不義の賊詐僞の賊
起て丈夫往けますらを

其三

惡むべし我敵の
辜なきを虐殺し
汝には母なき歟
泣く姉妹なく子あり
起て丈夫往けますらを

其四

敵軍の兵卒い
彼い我母の敵
我姉妹女子の敵
敵軍の畜生に
起て丈夫往け丈夫
非常をたこれ盡す
亡ぼせや亡ぼせや
往々天下に周く武勇を示
惡魔は比類なし
婦女子をば辱しむ
汝にい妻なき歟
其聲を聞かさるか
往々天下に周く武勇を示

其五

敵軍の兵卒い
彼い我妻の敵
神國の清き血を
穢さすることなかれ
往々天下に周く武勇を示
强盜か豺狼か

うち殺せ大砲で
衝き崩せ劒をもて
東洋の文明を
擊て〳〵突け〳〵
起て丈夫往け丈夫

我海軍

其一

朝日に輝く日の丸の旗
千島の果より沖繩迄も
一度も今迄穢されざりし
寄せ來る敵艦幾あるも

其二

亞細亞に又なき此島國に
幼き時より海にゝ出でゝ
我をば攻とする者あらば
寄せ來る敵艦幾あるも

文明の大敵を
蠻族の巢窟を
進むるは我が力
君の爲め國の爲め
往々天下に周く武勇を示

外山正一作

閃く皇國の軍艦共に
開闢この方異國の敵に
貴き海岸守れや守れ
千尋の底へと沈てしまへ

天の惠で生れし者は
暴風も恐れず波にも怖ず
武勇を比べん怒濤の中に
千尋の底と沈めて見せむ

其三

風吹き浪立つ嵐の時も
命を惜まぬ日本男兒
浪をば枕に死ぬるも覺悟
寄せ來る敵艦幾あるも

其四

弱き船にて大海渡り
鬼神なるぞと呼れし者ゝ
彼より受たる武勇を以て
寄せ來る敵艦幾あるも

其五

水雷大砲甲鐵艦を
皇國に仇なす敵のあらば
一々汝の力で懲らし
寄せ來る敵艦幾あるも

妻子の爲にゝ冲へ出でゝ
何ぞや恐れん敵の軍艦
君あり國あり又墳墓あり
千尋の底へと沈て見せむ

異國の海岸荒して廻はり
大膽不敵の汝の祖先
天晴れ守れや我が神國を
千尋の底へと沈て見せむ

自由に扱ふ非凡の手練
萬里を隔る國なりとても
國强の威嚴を天下に示せ
千尋の底へと沈てしまへ

國のさこふも　亦　國の
つかさの人のさかしきと
古も今も變りなき
文に傳ふるくさ〳〵の
音に我身の慾の爲め
ねぢよこさきの政事
虐ぐつかさのにくしさよ
苦しむさまの哀れさよ
東學黨の世を亂す
むつさささらき春ながら
雪さへ消へず深山路に
是れまでなりと思ひけむ
鍬り起れば山彦の
若殿原やつどひける

其二

ねじけし臣を排ひ除け
まつりを茲改めて
衰へ行もおしなべて
さかしからぬに依とかや
たゆしい若き西東
あとをたづねば明らけし
貢の物を重ふして
下の憂き目を外に見て
治めの下に立つ民の
されば此度韓國に
頃い明治之廿七
哀れすがたい冬枯の
積りし怨み數々の
蓬みはなよ竹鎗と
答ふる如く遠近の
聖の道を國々に
再び開く花の代の
いとも目出度ふもへ出て
のどけき風に榮へなば
犧牲に備はる覺悟なり
鉾先向けて御心を
臣たる道にろむくころ
思へばにくき閔氏原
よしや賊てふ名をとるも
鏡にかけて照しなば
不忠の者と譏らるも
君に盡さん忠州の
つなみの寄すか河水の

其三

虛は何處古阜に
備へもいとゝいかめしき
普ねく布きて守りしめ
惠の露に民草の
緑の色も美くしふ
兼てなき身と魁の
とはいへ君に弓を引き
しゞしとてたに惱ましめ
世を終るまで恨なれ
倒さで已まんこのまゝに
惡魔を拂ひ淨ばりの
いだく望みい全州や
誠赤心くもりなき
境に進む勢い
漲る如く凄しき
構への木戸もおごそかに
郡守の趙秉甲

折しもとうと関の聲
東學黨の一手にて
受けし怨を晴さんと
隈なく尋ね求むとも
後にと寄せし事なれば
幾手に別れ都路を
鎮めの爲めと官軍の
修羅の街へまのあたり
阿毘叫喚の苦しみを
互に引かじ去らばとて
東學黨の勢ひへ
覺悟の上の兵に
秋の木の葉の乱れ散り

其四

敵へ朝日のさす如く
砕け走ると耳にせし
門の内外に起りしへ
見事打ち取り是れまでの
彼方のすみやこゝの室
目指す敵は逃れたる
已むなく此處を引き上て
指して向へと向く先きに
下るに逢ふて端なくも
此の世の中に開かれて
受しや受くるさまなれど
暫しは勝ち負わかねども
金輪際まで攻めずば
いかでかなはん官軍も
散りゝ逃れ走りけり
味方へ結ぶ露の玉
大臣へいとゝ驚きて

日頃振ひし虎の威も
顔の色なへさめはて〜
見苦しかりき事共と
袁世凱は思へらく
今ころ幸ひ能さしほと
大臣をあまく綾なして
力かしてと請はしめば
知らで喜ぶ哀れさも
送り越されし千余名
わづか百姓一揆等に
敗けてすくゐを異國に
はた亦君に背たる東學黨の
其擧動や悪むべし

消へて行まし心地かや
うろたへ騒ぐ振舞は
外目に見たる唐の
ふくめ置かれし密事
言葉たくみに韓國の
授を支那に求めしめ
計りしわなにかゝるゑと
近きうれひも覺らずか
吁、いたましや韓國よ
國を擧つて打手向け
首を下けて賴むとは
人々よ是非なき事と推せ
其擧動や悪むべし

◎大鳥公使名譽之談判

史を繙き過を去りし
昔を今に小田卷の
くり返し つ〜 思ひなば
いくさの絶るひまはなし
しはし安らふ程もなく
はやてのすさぶも理りや
日本からと唐の
悪さも悪し唐之
つけて日本をはからんと
ろら恐ろしき西の人
事をかもふぞうたてける
公使之役目擔ひつ〜
義を見て勇む敷島の
談判とても幾度か
我を輕しめ侮るも
我より外に國なしと
ほこり驕れる唐土の
密にからをそゝのかす

東と西との別ちなく
西の戰のおさまりて
東の洋に波立ちて
三國かなへのさまを取り
ならび立ちたる其中に
手術はからを手の下に
平和の二字をよそにして
悅び合ふを知らずして
去れば大鳥圭介が
頃へ明治の甲午
大和赤心盡したる
手の裏かへすいらへもて
西の國にはいざ知らず
海原知らぬ井の蛙
大臣を始め袁使公
始末と知れゞ公使にも

朝鮮國のつかさ人
三日を限りおごろかに
いとも禮なさいらへ言
我國斯くまで盡したる
我か恥のみか國の名を
いでや最後の計
心を定め朝鮮の
文月の廿三日にて
赤き心のかず〳〵を
開けし西の國々と
安きを圖り圖らんと
すゝめ誘ひ勵ませど
開け行く世をさらふにや
誠を仇と仇浪の
くわしく聞へ上げゝれば
義あり勇ある赤心を
共に謀るに足らねねども
せまれど猶もさとらすに
流石心の大鳥も
誠もついに水の泡
汚す罪こそ重かれ
ねむりを覺さし呉んつと
宮居を指しき進みしゝ
帝に見へ是れ迄の
申し上げたるのみならず
並び立ち行く三國の
さきかけなけて韓國を
大臣ゝ清の差圖受け
しかもなめたる言の葉に
仇もて返す一件
帝もいたく日の本の
喜び容れて政事
改たむこぐちを開きしゝ
公使の譽れ愉快なり

公使の譽れ愉快なり

◎混成旅團渡韓の歌

抑もや明治の二十七
兵を起して叛きしが
勢ひ日々にしづまりて
しきりに齎す敗報に
援ひを乞ふて鎮めんと
大和の風に韓國の
春に遇ぬる心地せむ

●

我兵萬里の涙越えて
要害よろしき地を占めて
またゝく間に配置せし
たゝえぬ者ゞなかりける
晴れの軍と思ひほへば
隣の韓に東党の
討手に向ひし官軍は
都も已にあやふしと
今ゝ已むなく唐土に
聞きたる我ゝ油斷なく
國の民草ふのづから
事なく上陸なしけるが
備を設け陣を取り
いとも軍機にさかしきを
殊に兵士ゝ終生の
きびしき軍律露だにも

おかせし者とて無のみか
勇氣敦々自から
互に鋒先き交へなば
血汐は流れて川なすも
四百四洲を蹂躙し
建てんと勇むは頼もしき

身をべ正しく肅みて
交渉談判打ち破れ
骨は曝され山なすも
進みて敵を破るまで
北京城頭日の丸を

◎豐島激戰の歌

第一章

とくより備へし軍事
條約踏みて清國に
兵を出すと告知あり
混成旅團組織して
彼より先きに逸早く
唐人の夢の間に

いにし日結びし天津の
通牒なせ彼よりも
されば一時も猶豫なく
海を渡りて朝鮮に
神の業よか飛ぶ鳥か

居留の民や公使館

保護の爲めにと送られし

混成旅團を帥あしは
大島少將義昌ぞ
朝日に薫る歌嗚の
日本魂備へたる
人の末後の譽れこそ
渡りて志かも日の本の
典怯ふせまじと諸共に
勇んで進む軍隊の
今日や戰ひ開かれん
戰雲愈迫り來て
折しもあれや霹靂の
雷ならぬ砲聲に
頃は甲午の文月末
彼方の沖の豐島に
來して起る船戰
清國兵を朝鮮に

智勇機略の聞へある
君に從ふ兵士は
櫻の花と咲きにほふ
國に忠義の大丈夫ぞ
いと重かるれ異國よ
稜威を汚さす振舞ふて
言ねど臍をかためつゝ
旭日の御旗を犀かせむ
明日や軍の起らんと
世は常闇の物凄し
響きは空に鳴る神か
天柱地軸裂けんとす
廿五日の辰の刻
日清互に衝突を
いくさの源因を尋ぬんに
送りて不意の準備なし

よしや日本と戰ふも
誇らんものと英國の
軍隊兵器を載せ積みし
支那の軍盤操江が
指して向へ心迎船
しづ〳〵進み來りけり

第二章

月日も時も全じ頃
浪速吉野と秋津洲
進む折から黑煙を
噴遠廣乙両艦と
後の歷史に傳らん
ショパイチールの島邊なる
見るも哀れの振舞ゑ
禮法亂るのみならず
ハヤ戰の用意せり

首尾よく勝ちて萬國に
高陞號を雇入れ
運送船と護衞なす
太沽發し牙山港
臍遠廣乙牙山より
我日の本の軍艦の
浪を蹴たて〻仁川に
あげて此方に向ひたる
端なく逢ひし處こそ
豊島冲のもよりにて
此時彼等噪ぎ起ち
將旗を揭げし我艦に
一々敵意を示しつ〻
去れども狹き海上の
船をあやなす便あしと
南にうつし沖中に
あはて惑ひて清艦の
衆てかくもやあらんすと
勢ひ込めて戰へり

第三章

一時あまりの戰ひに
廣乙號は速力も
東海灣の淺き瀨に
吉野に追はれ渤海に
此時忽ち支那の沖
此方を指して來りしは
眞近に見れば清艦の
英吉利國の商船旗
我軍艦の秋津洲
只一發の砲戰も
我三艦〻方向を
出で〻巨離さへ近づけど
大砲きつて發ちけり
覺悟をなせし我船は
敵は全く敗れたり
減少なせと逃れ出て
船を乘り上げ濟遠は
只管逃れ走りけり
二隻の滊船烟を吐き
敵か味方か白浪の
操江號に其一は
建てたる支那の兵船ゑ
操江號に迫りしを
なさで白旗揭、けたり

降を乞へば將校も
我兵員の乘り轉り
其檣の頂に
風に靡かせ飜る

第四章

浪速い空砲一發し
命令なして彼船に
船のくま〳〵調べして
清兵一千百余人
支那の政府に雇はれて
是より信號問答に
船長頗ぶる支那人の
其船見捨てと合圖なし
掲げて茲に破壞する
聲かせて乃沈めしい
船長以下は皆海に
兵士も船も捕獲して
武器も収めて處分なし
我軍艦の旗章
運送船に投錨を
人見大尉を派遣なし
高陞號と呼びなして
外に兵器を積載し
牙山に進む途なりと
しばらく時をうつせしが
協迫受るを知りければ
前檣に赤旗を
評議一決大砲を
午後の一時と覺へける
飛び込みたれば我艦は
ポートを下し支那人の
物ともなさで漕ぎめぐり
實にや此日の戰ひは
愉快の上の大勝利

◎進擊の歌

第一章

御國の爲めと君の爲め
矢玉を冒し進みつゝ
御國の爲めに山往かい
大君の爲め海往かば
奮ひ討つころ軍人の
本分なれば義務なれど
是れにもとるを片時も
進むに敵はならぬなり
勇む大和の魂なれ
死物狂ひの彈丸を
船長始め救ひけり
艦体兵員恙なく

第二章

戰の場に大丈夫が
命を的と覺悟して
草むす屍も恐れなく
水つくかはねも厭ひなく
國と君とに盡すべき
去れい大和の兵士は
とよなき恥と思へば
此心こそ忠と義に

月日も時も全じ頃
浪速吉野と秋津洲
大和魂備へたる
大和刀をぬき連れて
觸るれば人も馬もなく
振舞んずと突き進む
暴ぶる獅子も怒りなる
蛟龍も虎も倒すべし
破らで止まぬ兵士ハ
雷まどふ砲聲も
陷めるまで進むべし

◎威海衛の夜襲

豊島沖の戰、ひに
勢ひ益々加れる
長月十日東雲の
威海衛に向ひける
北洋一の要地にて
我日の本の軍艦の
涙を蹴たてゝ仁川に
大和男子のふるひ起ち
夏尚寒き其光り
薙ぎたつ鋭き切味を
進むに敵ハあらぬなり
鷲をも拂ひ盡すべし
火の中水の底までも
霰と降れる丸とても
などか恐れん敵陣を
敵の軍艦とりこにし
皇國の海軍ハ
星の光りを目的となし
抑も此處ハ清國の
海と陸との防ぎさへ
いと嚴かに備ふれば
將校下士に至るまで
歸る心ハ夢知らず
黄海沖に艦体ハ
せめて此世の名殘りにと
上下別なき無禮講
歡を盡して樂しむも
知らぬ顔なる勇しき
磨き上げたる兵士よ
折しも海ハ靜けくて
遙かあなたと兵士ハ
祝しまつりて禮拜し
砲臺目がけ擊出せり
草帽山の臺場より
我れに射擊を始しが
達するものハなかりけり
敵の軍艦一隻も
我艦体ハ失望し
我攻擊の艦体の
再び生きて古郷に
覺悟を極め死を決し
投錨なしてしばしだに
酒汲みかハせ諸共に
勇みに勇むますらをの
明日ハ命の戰の場
さまは流石に大和魂
酒宴も茲に終ぬるが
夜目にハ見にぬ故郷も
等しく君の萬歳を
舳艫銜みて進み擊ち
防ぎ守れる敵兵ハ
之れに應じて烈しくも
遠き距離とて丸一つ
斯くて手いたく戰へど
威海衛港出でざれば
素より砲臺破壞する

目的なるにあらずして
去れど影さへ形さへ
砲撃止めて羌なく
静に列を正しつゝ
歸る海路の勇ましき

敵の艦体討たん爲め
見へざる事の已むを得ず
一先づ此處を引揚げて
歸る海路の勇ましき

◎成歡攻撃の歌

第一章

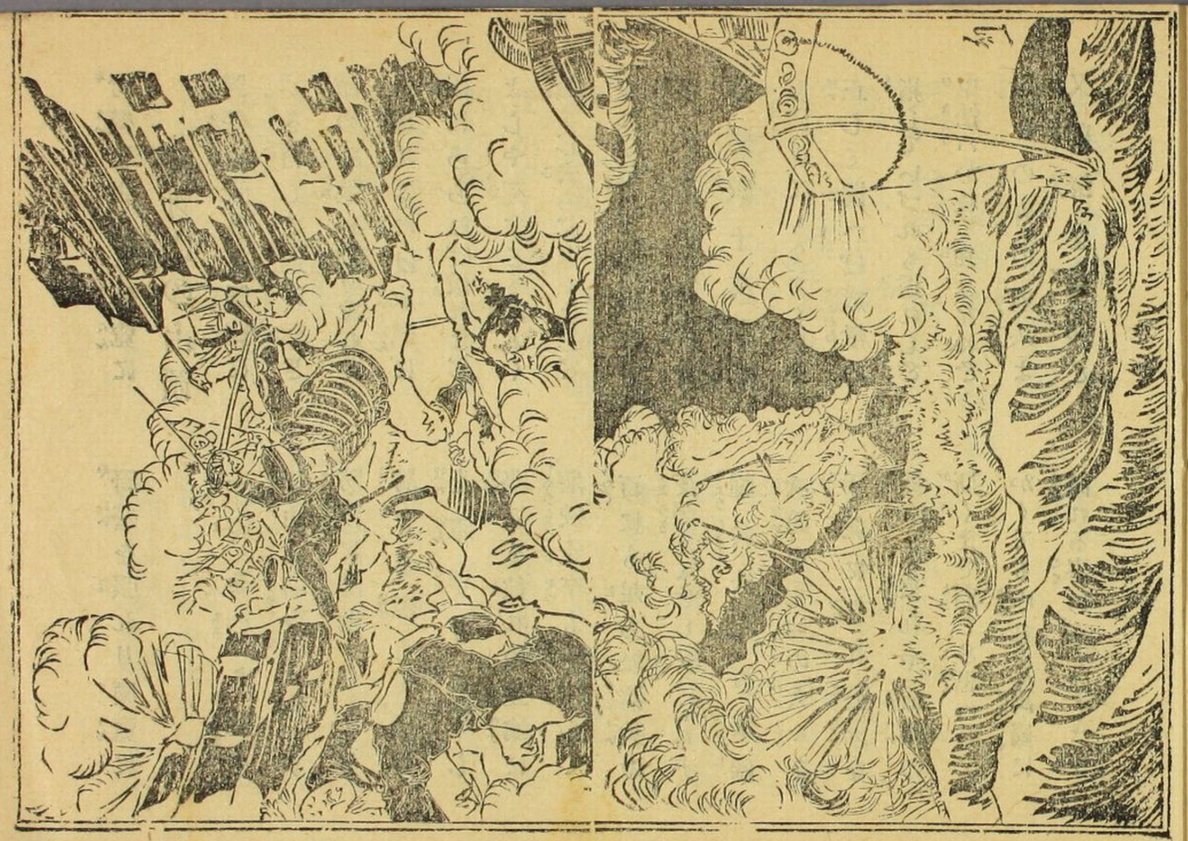
左右の翼に備へたて
成歡縣を落したる
戰ひ交へ砲聲の
松崎大尉の勇悍に
哀れ大尉ハ空しくも
あがきを進む九泉下
絶にて止みしが左側より
敵ハ少しも應戰を
猶も烈しく十余回
清兵始めて應じつゝ
左右両翼一時に
等しく進む攻め軍
愉快のさまを記さんに
起り初めしは安城渡
我軍此處を乘り取れど
敵の彈丸飛び來り
夫れよりしはし砲聲も
ハヤ發砲を始めたり
試みざれば我兵ハ
大砲放ち轟かす
之れより激戰こゝかしこ
奮ひ進んで清軍を
撃ちつ撃れつ血煙と
いと物すごき其内を
吶喊なして敵營を
今こう見せん日の本の
振舞ひ吳れんと薙ぎ倒し
腕に手練の早業に
浮き足立ちて見ければ
全軍どつと鬨の聲
秋の木の葉のちり〳〵と
牙山を指して遁れけり

第二章

成歡縣は清國の
兵を率ゐて防ぎしが
警報頻りに至る故
葉將軍ハ全力を
雌雄を此處に決せんと
一千五百有余人
覺悟と思へと左にあらず
砲烟彈丸凄じく
あなたこなたとくゞりゆき
縱横無盡に突き進み
大和刀の切れ味を
嘗るを幸ひきたへたる
清軍終に防ぎ兼
進め進めの號令に
擧げて攻むれば敵兵ハ
營所を見捨て亂れ散り
副將聶の千余なる
我軍大擧攻撃の
牙山に根據を搆へたる
成歡縣に聚めつゝ
豫て牙山に屯せし
送り越しハ必死なる
若しも敗れば天安に

退く準備をなせしとは
特性なるれ清兵の
我軍敵の謀計を
左右の翼を張り進む
兵氣振はぬ敵なるに
獅子奮迅の勢で
此戰ひに清軍の
負傷者四百以上なり
雲か霞と遁げ延る
我軍聶の幕營を
直ちに壘を捨て走り
夫のみならず大將の
書類もすてゝ遁るとゝ
是れに從ふ兵等
軍服帽子道々に
衣服をゝぎて走りしゝ
我軍隊ゝ勢に
未だ牙山に至らねど

日本に知らぬ怯懦ところ
敗れ取りしゝ理りぞ
既に知りにし事なれば
要害如何に堅くとも
かてゝ加へて我兵の
息をもつかず破りたり
戰死者一百余名にて
總大將も何れにか
中にも聶ゝ狼狽し
圍み烈しく攻め立つや
身も軍服を脱ぎ去れる
片時離すべからざる
大將斯のさまなれば
何條支ふ術知らん
捨てゝ朝鮮國人の
見るも哀れの樣ならめ
乘じて以て追擊し
日も西山に傾けば



野營を張れり腰寛に

◎牙山の占領

野營を張りて腰寛に
空を冐して進み行き
敵の手並ハ知り難れど
根據地なれば成歡に
後にあらねば破れまじ
よしや死すとも潔よく
逢まじ去らじ退くまじと
至れど敵ハ見にぬなり
我先着の軍隊を
彈藥數十萬發と
其儘すてゝありしにぞ
正して問へば成歡の
指していづれも遁れしと
卑怯ハかねて知りたれど
思ひの外の弱兵よ
又朝鮮を屬邦と

野營を張れり腰寛に

一夜を明し曉の
牙山を略取なさんとす
防禦に防禦つくしたる
勝さる烈しき戰の
全軍擧り血戰し
夢にも彼れの生擒に
將校士卒も覺悟して
百にも足らぬ清兵の
夜襲をなせしのみならず
糧食六七百餘
次第を土地の人々を
手並に恐れ公洲を
聞くも哀れや清兵の
斯くまで弱しと思ハぬに
かくても中華と萬國に
誇れる事のおかしさよ

敵兵百萬何のろの
蹴りて破らん北京城

◎安城渡の血戰

吁大丈夫の潔よく
譽ハ高く靖國の
死しても薫る人の花
一筋路の安城渡
とゝにかしこに沼や澤
一手ハ茲を渡らんと
清兵五百有余名
堤にかくれ隱れ伏し
等しく發つるべぎり
驚ろくべきにあらざれは
衛生隊のありけれは
松崎大尉直臣ハ
汝等聞けよ汝等は
日本兵士にあらずやハ
皇國を後にして

要所〳〵を陷入れ

戰死を遂げて後の世に
社に御魂まつらるハ
茲に成歡役の時
右も左も水田にて
松崎大尉の率ひたる
進み〳〵て來りしに
橋のまなかを斷ち切りて
我軍近く來し時に
不意を討れて我兵ハ
銃を帶びざる一群の
しばしためらい止まるを
聲勵してさとすらく
猛しと四方にひゞきたる
君の御影を伏し拜み
遠く異域に踏み入りし

夫れより先きに生命をば覺悟なせしを忘れしや最後を遂げて名を留むやよ汝等よ四五百のもしも敗れを取りしなば寧ろ生恥かゝんより勇氣日頃に百倍し劒を揮ひ眞先きに我軍之れに勵まされ流を乱し渡りしが胸を貫かれてあへあくも劒放たず握りたる大尉撃ると聞からに獅子の暴れたる勢にあまさじ洩さじ切り殺し塵しにぞなしたるハなどて関いさましく先登一の君の名ハ君と國とに捧げたるやまして武人ハ天晴の惜きハ死後の名にあらめかよわき敵にためらいて人に顔をば合されじ死ねよ大丈夫死ねかしと自ら玉の楯となり馬を躍し號令すとつとゝめいて河中に惜しや大尉ハ流丸に其場に倒れたりけるがまゝによみぢの門出せり我兵士ハ怒り立ち敵のやつばら一人だも大尉の仇をかへせよと大尉の武勇にあらずして萬歳唱ふる事を得ん萬代かけて轟きて後のいくさの人々のとよなき鑑と傳らん

◎平壤の攻落し

福羽美靜作

あゝ盛んなりわがいくさ頃しも九月の十五日城の四面をうちかこみ十六日の曉に兵器米穀かず〳〵を敵の死傷ハかぎりなしかゝる烈しき戰ひに死傷ハ國家の忠臣ぞ將校ろれ〳〵忠勤ぞ北京城に日の御旗武勇の力をあらはせよとよなき鑑と傳らん

◎平壤城とりとの支那人

福羽美靜作

日本の軍隊ずゝませて支那人四千をうちとろし一萬あまりと聞えたり平壤城をおとしいれとりこにしたる支那人もろの支那人を養ふに

平壤地方ハ食料に船にて外へやらんにハこれにも日本も苦しめり其一萬の運送も朝鮮國の役として日本の國に渡すべしかの國人に養ハせ入費となしてあらしめばこれぞ一ッの良策と〻に一言こゝろみにかてる軍を祝ふなり

◎太孤山絶大勝利の歌

歴史に永く日の本の名譽を得たる戰ハ豊島沖に清艦と互に彈丸を降しつゝ操江號を生擒し沖にハ清國軍艦のとぼしき處夫故に十五艘にも積み餘りこゝに一ッの考へに其一萬の食料もかの地の船に皆乘せて然して日本の土地にして事の濟む迄朝鮮の日本の人も安心し人も忽ちはめぬべしのべてうたひて平壤の日本の軍を祝ふなり

勇猛無比の海軍の永く傳り遺るらん互に浪を蹴立てつゝ終に戰ひ打ち勝ちて今又玆に大孤山數十四隻其上に水雷艇の六艘と端なく戰ひ開かれて砲彈は霰と飛しきる午后一時より砲聲の五時の頃まで止まざりき激しき戰ひやみしにやイトモ芽出度く清艦を又ハ火をもてやき討ちし指して列さへ亂し逃げ追擊なせる我艦も水雷艇にも備ふ故されどもかゝる大勝を大光榮と知らるなる比獻も共に苦戰して舵を破られたりけるが凱歌擧げて勇しく稜威の影ハきらめきて海の底まで輝かん

我艦体ハ十二隻硝煙は空に漲りて長月十と七日の轟き初めて暮近き勝敗いつか定まらん箇の音さへ絶へけるか破りて數艘打ち沈め其余の艦ハ威海衛遁れ去り行く後よりおしや月さへ暗くして敵の所在を失へり得たるハ實にぞ皇國の此戰ひ赤城艦西京丸ハ彈丸に左せる破損もあらずして引き揚げたりし愉快ざよ海の底まで輝かん

◎朝鮮昔軍記

太閤秀吉文祿の壹岐の勝本吉野氏
實景うつしゝものぞかし
釜山の城にせめかゝる
半弓矢ぷすまつくりかけ
味方ハ矢にもをめずして
二タ時ばかり世の中も
天地に響けて射かくれば
かしらを出す敵もなし
我も〳〵とせめのぼり
敵ハ所をハづしつゝ
隱れかたなきものどもハ
皆手を合せてひざまづき
のう〳〵といふ其聲ハ
夫を方味ハきゝつけず
是を軍のちなまつりと
みな〳〵首を切捨てゝ

朝鮮征伐うの時に
釜山のいくさの手扣は
うの時四月の十三日
城のうちには待かけて
雨の降るごと射かくれど
鉄砲數をうろへつゝ
まつくろやみとなれる迄
楯も櫓も射くだかれ
高さ三尋の石がきを
かめき叫んで攻ければ
家の挾間や床の下
東の門にせきたゝみ
開もならはぬかちことバ
助けよところきこゑけれ
切付打捨てふみころし
男女も犬猫も
三萬ほどゑを見にけるる

今朝卯の刻に攻かゝり
この手扣をよむときハ
みる心地して勇ましく
萬々歳までのこりけり

たけむまのいくさ

來れ友だちいざ來れ
昨日遊びしいくさごと

●

組ハ二手に別れたり
勇み進むハ平壤の

●

小川を前に拒ぎつゝ
龍をにがける旗章

●

こだまに震ふときの聲
つくして勵む兵士ハ

●

ひくなさらじな進めよと

巳午の時にせめおとす
むかしを今のめのまへに
日のもと軍勢今の手柄

（擬手擬機）

向ふの岡の芝地にて
今日もせましや諸共に

朝日の御旗かざしつゝ
皇軍擬ふて

備へを堅く守りつゝ
支那の軍を擬ふて

命を捨てゝ皇國を
こよなき上の譽れなり

勢ひ込めて攻め立てバ

敵ハ木の葉のちり〳〵と

●

入りつ亂れつ戰ひを
樂しき遊びハおしけれと

●

今日のすさみの敵となり
合圖の喇叭吹き立てば

○

隊伍を組みていかめしく
御旗を風に靡して

◎日章旗

降來る彈丸や砲聲は
閃く影や大刀風ハ
大和男兒等奮ひ起ち
けむりのなかに衝き入て
攻め破るまで諸共に

◎碧蹄館の血戰

とりでを見捨て雲露
入日の影ハかたぶきぬ
イザヤ歸らん我友よ
遁れし兵集にんと
笑を含みて小蔭より
岡をうしろにあぜ道を
軍歌を唱へいさましく
雨雷とまがふとも
如何に烈しくすさぶども
やまと刀を揮ひつゝ
仇人原を薙ぎ倒し
かさして進め日章旗

剛勇無類の日本兵
共に異國の人々の
今や日清戈を取り
哀れや彼れハ戰の
遁け行くさまの見苦しさ
昔ながらの特有か
世の人々の知らぬなき
兵を起して朝鮮に
鋭き太刀に何かして
壘は破れ城さへも
都の空を後になし
さまよふ内に生擒られ
援を支那に求めしに
政の事を握る頃
猶豫ハ國の一大事
譬へ如しいざさらバ
明朝一の武將ぞと
彼の李如松を大將と

鋒先き鋭き日本刀
恐れ戰の慄く處なり
銃を負ふて戰へど
其度々に敗れ取り
おくべうみれんは清國の
今にかハらぬ其昔し
文祿年間大閤が
攻め入りにしが皇國の
及ぶべきかハ忽ちに
攻め落されば國王も
二人の皇子も北の藩に
いとゞ危く見ければ
支那ハ其時明の世の
急報しきりに齎せば
唇やぶれ齒のさむき
援ひの兵を送らんと
人のうやまひ恐れたる
なして大軍すべさせて

朝鮮國をゆすくひける

討清軍歌 終

明治二十七年十月十六日印刷
同　年十月十九日發行

東京市淺草區茅町一丁目十二番地
編輯兼發行者　岡安平九郎

仝市蠣殼町三丁目九地番
精英舍
印刷者　德原芳太郎

版權所有